

4. 西洋文化学系

西洋文化学系は、ヨーロッパおよびアメリカの文化について、文学と言語に視点を定めて研究を行う部門であり、古典古代から中世、近・現代までの時代を広くカバーするとともに、取り扱う言語に応じて、西洋古典学、スラブ語学スラブ文学、ドイツ語学ドイツ文学、英語学英文学、アメリカ文学、フランス語学フランス文学、イタリア語学イタリア文学という7つの専修に分かれている。

いずれの専修においても文献資料の正確な解釈と整理が研究の基礎となるため、語学能力は極めて重要である。各専門領域の言語は言うまでもなく、ラテン語・ギリシア語の基礎知識は非常に有益であり、また近代語については作文や聞き取り、会話などの実践的運用能力も高める必要がある。従って全学共通科目の語学単位とその他の必修の語学の単位は1・2回生の間に取得しておくことが望ましい。

7つの専修はいずれも論理的・実証的であると同時に自由な発想に基く研究を重んじており、それぞれの地域や文化圏の文学・言語・思想・社会に関心をもつ学生諸君を幅広く迎えることを望んでいる。文学研究科図書館には、長い歴史と伝統を誇る旧文学科から受け継いだ豊富な文献資料が所蔵されているので、これらを存分に活用してほしい。また、人間・環境学研究科や人文科学研究科など学内他部局、そして他大学からの講師も授業を担当して、充実したカリキュラムを組んでいる。専修所属の教員名、著作等については各専修の項を参照されたい。

■ 西洋古典学専修

教授 高橋 宏 幸 恋愛エレゲイア詩, ラテン叙事詩, ローマ演劇 (令和4年3月退職予定)

准教授 河島 思 朗 ラテン文学, 神話, ローマ文化

〔著書・論文〕 高橋『ギリシア神話を学ぶ人のために』世界思想社, 2006. 『カエサル『ガリア戦記』歴史を刻む剣とペン』岩波書店, 2009.

河島『基本から学ぶラテン語』ナツメ社, 『ホメロス『イリアス』への招待』(共著) ピナケス出版。

本専修は、古典古代にギリシア語およびラテン語で書かれたテキストについての文献学的研究に加えて、広く古典古代の文化全般を研究の視野に入れ、字義どおり西洋古典学と呼びうる総合的学問研究を目指す。

前8世紀のホメロスから後2世紀のラテン作家まで同一の文化的精神的伝統を共有する世界を古典古代と呼ぶ。そこにおいてギリシア文学は叙事詩・抒情詩・悲劇・喜劇・歴史・牧歌・小説など、さまざまな文学ジャンルを生み出し、ラテン文学はギリシア文学を継承しつつ、恋愛詩・風刺詩・弁論など独自の発展を織り込んでルネッサンス以後の再生に連なる古典の伝統を築き上げた。

これらの文学作品を主要な研究対象とし、原典批判を基本に、テキストを精細に読み、背景にある伝統を踏まえ、文脈に即した解釈を提起することが本専修の目指す一つの方向であり、そこには最近発達した記述構造分析、文体論的研究、神話構造分析などの成果も取り入れられる。

他方、西洋古典学という学問は、古典古代の当時であっても近代の西洋古典学の出発点であっても、文学、哲学、歴史学など人文科学分野にとどまらず、数学、物理学、天文学、医学、生物学などの自然科学分野をも含んで、人間にかかわるすべての学問分野にまたがる形で成立した。人間を分割しえない完結した個体として総体的に捉えようとする視点がその根幹にあった。近代の関連諸科学の発展は西洋古典学にもめざましい諸成果をもたらしたが、反面、専門領域の著しい細分化の結果、西洋古典学本来の学問としての全体像が見失われることにもなっている。

本専修は、こうした面への反省から、原典批判・テキスト解釈ではおおいきれない古典文化の諸相をも研究の対象に取り上げる。ギリシア文化の形成にあたっては、エジプトやメソポタミアの先進国から多大な影響が及び、他方、古典文化の伝統はビザンチン文化やカロリング朝文化、さらにはイスラム文化によって継承された。このような文化史の大きな流れをも視野に入れながら、すぐれた文学を生み出した古典古代の文化を総合的に研究する。

古典の文学あるいは語学に興味のある学生はもちろん、文化に主として関心を抱く学生も、本専修を選択しようとする学生はまず、第一次資料となるギリシア語・ラテン語の原典を読みこなす能力を養うことがもっとも重要である。できるだけ早い段階で両語学の初級文法を(少なくとも一方の4時間コースを2回生時に)習得することが必要不可欠である。語学面ではまた、辞書・研究書は外国語のものが多く、英・独・仏そのほかの近代語の学習も重要となる。そして「講読」および「演習」において読みの正確さと速さを高め、「特殊講義」において古典古代全体を視野に入れた研究の方法を学ぶ。また、古典古代の全体的理解という点では、古代哲学史、西洋古代史の研究領域とも密接な関連を有するので、これらの授業の積極的受講も望まれる。

■ スラブ語学スラブ文学専修

教授 中村 唯史 近現代ロシア文学・思想, ソ連文化論

[著書・論文] 『二十六人の男と一人の女：ゴーリキー傑作選』(翻訳・解説, 光文社古典新訳文庫, 2019), 『自叙の迷宮：近代ロシア文化における自伝的言説』(共編著, 水声社, 2018), 『ポケットマスターピース4・トルストイ』(共訳, 集英社文庫, 2016), 『映像の中の冷戦後世界：ロシア・ドイツ・東欧研究とフィルム・アーカイブ』(共編著, 山形大学出版会, 2013), 『再考ロシア・フォルマリズム：言語・メディア・知覚』(共編著, せりか書房, 2012), ヴィクトル・ペレーヴィン著『恐怖の呪』(翻訳・解説, 角川書店, 2006).

また, 上記に加えて, 下記の先生が, 協力教員として教育および研究指導に参加している。

准教授 堀口 大樹 (人間・環境学研究科) スラブ語学, バルト語学

[著書・論文] Имперфективация заимствованных глаголов в русском языке. *Russian Linguistics*. 42, 345-356, 2018, 『ニューエクスプレスプラストラトヴィア語』(白水社, 2018), Latvian attenuative pa-verbs in comparison with diminutives. In P. Arkadiev, A. Holvoet, B. Wiemer (eds), *Contemporary Approaches to Baltic Linguistics*, 235-261, 2015.

本専修は, ロシアから東欧にかけての広大な地域に分布するスラブ諸民族の文学, 文化, 言語を, 広い視野から研究・教育することをめざしている。スラブ民族は, ロシア, ウクライナ, ポーランド, チェコ, ブルガリアほか, 多様な民族に分かれ, その文化・言語は全体として一定の均質性を持つと同時に, それぞれに個別の特徴を示している。

専修担当教員の中村はロシア文学・ソ連文化論を専門とし, おもに 19 世紀初頭から現代に至るロシア文学・思想・文化を対象とした研究を行っているが, 多言語・多文化国家を標榜したソ連時代の状況にも強い関心を持っている。協力教員の堀口は, ロシア語とラトビア語を主な対象としたスラブ語学とバルト語学を専門とし, テキストの特徴やコミュニケーションの場面, さらには社会や文化, 歴史などの多角的な視点から言語事象を研究している。

その他にも, 文学研究科, 人文科学研究科, および他大学の先生方の助力を得て, 多様な授業を専修科目として指定している。また授業の他にも, 公開講演会や上映会の開催等, 学生諸君の多様な関心に応えられるように努めている。

とは言え, 現時点において学生諸君が習得するために最も条件が整っており, 1 回生から学習することができるのはロシア語である。ロシア語がスラブ研究のための国際的共通語としての地位を占めていること, トルストイ, ドストエフスキー, チューホフほかのロシア文学が近代以降の日本の文学・思想に深甚な影響を及ぼしてきた経緯などにも鑑みて, 本専修の授業は近現代ロシアの文学・文化・思想・言語を主たる対象としている。必修の授業の一つである外国人実習はロシア語についてのみ行われている。

本専修の授業では, 様々な可能性も含め, 文献を緻密に読み解き, 解釈する作業が中心だが, そのためには言語に関する広い知識と感性とともに, 背後にある時代や伝統に関する理解も必要なので, 講義や特講の授業では, 文学史や文化史, また文学作品や文化現象を考察するための枠組や方法についても講じている。専修の授業でロシアやその他のスラブ世界の文学・文化・言語を考えるための視座を確立してもらいたい。

そのうえで, 学生諸君がどのような領域, 分野に関心を持ち, 理解と考察を深めていくかは, 個々人の選択に委ねられて

いる。教員がすべての学生の関心に十分に答えられないこともあるだろうが, その場合でも諸君と意見や見解を交わすことはできる。人文学の基本が「対話」であると喝破した文芸学者ミハイル・バフチンを生んだロシアを初めとするスラブ言語文化の研究を志す諸君に期待したいのは, 言語に対する感性と, 文化や歴史に関する知識, 自分の関心をどんどん広げていこうとする知的意欲, そして教員や先輩との議論も辞さない自主的な姿勢である。



写真：専修主催公開講演会 アレクサンドル・アレクサンドロフ氏(ロシア文学研究所)「20世紀初頭のロシア・ジャーナリズムにおける新しい方法とその受容」(2017年1月)

■ ドイツ語学ドイツ文学専修

教授 松村 朋彦 近代ドイツ文学・文化史

准教授 川島 隆 近現代ドイツ文学・メディア論

〔著書・論文〕 松村『越境と内省—近代ドイツ文学の異文化像』（鳥影社，2009），『五感で読むドイツ文学』（鳥影社，2017），『文学と政治 近現代ドイツの想像力』（共著，松籟社，2017）。

川島『カフカの〈中国〉と同時代言説』（彩流社，2010），『ハイジ神話 世界を征服した「アルプスの少女」』（訳書，晃洋書房，2015），『ポケットマスターピース 01 カフカ』（編集協力，集英社，2015）。

本専修の研究教育の対象領域は、中世から現代へといたるドイツ語圏（オーストリア，スイスを含む）の言語文化全般にわたっている。松村教授は、18世紀後半から19世紀前半にかけてのドイツ文学を文化史的な観点から考察しようと試みている。川島准教授は、19世紀から現代に至るまでのドイツ文学をジェンダー論的に読むかたわら，メディア論にも関心を寄せている。専任教員の専門分野からもわかるように，研究教育の中心をなしているのは18世紀以降のドイツ文学であるが，それ以外の研究領域についても，人間・環境学研究科や人文科学研究科の教員ならびに他大学からの非常勤講師，さらには外国人教師の協力を得て，多種多様な授業が開講されている。ドイツ語学に関する授業も毎年おこなわれている。授業の他に，学生による読書会も盛んである。学生の卒業論文の対象は，近代・現代の作家や作品をはじめ，ドイツ語学ドイツ文学のさまざまな領域におよんでいる。

本分野の研究教育の特色は，講座開設当初から一貫して，原典の綿密な読解を重視する点にあり，この伝統は今日もなお生きつづけている。とりわけドイツ語を学びはじめてまだ日の浅い学部学生のための講読や演習の授業では，ドイツ語のテキストを正確に読むための訓練に最大の力点がおかれている。だが他方では，新しい方法論の出現と対象領域の拡大によってますます多様化しつつある現在の研究状況をふまえて，せまい意味での語学・文学研究の枠組にとらわれることなく，広くドイツ語圏の諸芸術や文化と社会のさまざまな問題に目を向けることもまた必要であろう。

さらに，ドイツ語圏の言語文化が他の欧米諸国との密接な影響関係のもとに成立，発展してきたことを考えるなら，ドイツ語学ドイツ文学を西洋文化全体とのかかわりのなかでとらえようとする視点もまた，今後ますます重要になってくるだろう。

このような意味で，ドイツ語学ドイツ文学を学ぼうとする学生諸君には，言葉に対する鋭敏な感覚と西洋文化全般に対する広範な関心をもつことを期待したい。

■ 英語学英文学専修

教授 佐々木 徹 イギリス小説 (令和4年3月退職予定)

教授 家入 葉子 英語学

教授 廣田 篤彦 イギリス演劇

[著書・論文] 佐々木 Thomas Hardy, *The Hand of Ethelberta*, 校訂・編集, Everyman Paperback. チャールズ・ディケンズ『荒涼館』訳書, 岩波文庫.

家入 *Negative Constructions in Middle English*, Kyushu University Press. *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English*, John Benjamins.

廣田 “The Tardy-Apish Nation in a Homespun Kingdom : Sartorial Representations of Unstable English Identity”, *Cahiers Elisabethains* 78 (Universite Paul-Valery Montpellier III 2010).

“Circes in Ephesus : Civic Affiliations in *The Comedy of Errors* and Early Modern English Identity”, *The Shakespearean International Yearbook* 10 (Ashgate 2010).

本専修の講義は、3名の専任教員のほか、人間・環境学研究科および学外の教員によって行われ、英語学と英文学のほぼすべての分野を網羅するようになっている。(大多数の講義はアメリカ文学専修の講義としても認定され、また、アメリカ文学専修の講義の大多数は本専修の講義としても認定される。) 英米人教員によるものを除いて、講義は日本語で行われるが、その場合にも教材は英語の原典を用い、作品の正確で厳密な読解を特に重視する。

本専修では英語学と英文学に関する多くの科目を提供しており、特定の狭い分野のみに限定することなく、幅広い関心を養うのが好ましい。卒業論文は英語で書くことになっているので、英語の運用能力を高める努力が必要とされ、英米文専修学生を対象に提供する ‘Academic Writing’の科目を履修することが望まれる。

■ アメリカ文学専修

准教授 森 慎一郎 アメリカ小説

准教授 小林 久美子 アメリカ小説

〔著書・論文〕 森「机の上の原稿—『夜はやさし』における精神科医の破滅について」（『英語青年』第 147 巻第 7 号）、「ギャツビー・ゴネグション—フィッツジェラルド『偉大なギャツビー』をめぐって」（『みすず』第 46 巻第 3 号）。同アラスター・グレイ『ラナーク—四巻からなる伝記』（訳）国書刊行会。同 F・スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』（訳）ホーム社。
小林「『人間の根源的な状況』について」（『フォークナー』18 号，2016 年）。“Only the Flat Irons: Counter-monuments in *The Sound and the Fury*”(*The Journal of the American Literature Society of Japan* Vol. 12, 2014 年)。同ラモーナ・オースベル『生まれるためのガイドブック』（訳）白水社。

本専修の授業は、2 名の専任教員のほか、人間・環境学研究科および学外の教員によって行われ、主として 19 世紀以降のアメリカ文学について、できるかぎり多様な領域を網羅するようになっている。また、本専修の授業の大部分が英語学英文学専修の単位として認定されるのと同じように、英語学英文学専修の授業も大部分、本専修の単位として認定される。学生は特定の狭い分野のみに限定することなく英語学英文学の分野や他の外国文学についても、できるだけ広く理解を深めることが望ましい。

英米人教員によるものを除き、授業は日本語で、英語の原典を用いて行われる。特に重視されるのは作品の精密な読解であるが、卒業論文は英語で書くことになっているので、‘Academic Writing’等の科目を履修して、英語の運用能力を高める努力が必要とされる。また、日本文学にも関心を抱き、日本語の理解、日本語による表現能力を深めるために常日頃努力することも大切である。

■ フランス語学フランス文学専修

教授	増田 眞	ルソー、ディドロを中心とする 18 世紀フランスの思想と文学
教授	永盛 克也	ラシーヌを中心とする 17 世紀フランス文学
准教授	村上 祐二	プルーストを中心とするフランス近現代文学
特定准教授	ジュスティヌ・ル・フロック	17 世紀フランスの思想と文学 (令和 3 年 10 月着任予定)

上記に加えて、学内の下記の教員が、講師として教育ならびに研究指導に参加している。

教授	多賀 茂	(人間・環境学研究科)	18・19 世紀の詩と思想
准教授	守田 貴弘	(人間・環境学研究科)	言語学, フランス語学
准教授	中筋 朋	(人間・環境学研究科)	演劇学, フランス近代文学
准教授	森本 淳生	(人文科学研究所)	19-20 世紀の文学と思想 マラルメ, ヴァレリー

- [著書・論文] 増田『ルソーを学ぶ人のために』(共著), 世界思想社; *Les Destinataires du moi : altérités de l'autobiographie*, Editions universitaires de Dijon (共編著)
- 永盛『文学作品が生まれるとき—生成のフランス文学』(共著), 京都大学学術出版会; *Comment la fiction fait histoire*, Champion, 2015 (共著)
- 村上 *La Grande Guerre des écrivains, d'Apollinaire à Zweig* (共編著), Gallimard, 2014; Marcel Proust, *Cahier 44* (批評校訂版), Brepols Publishers/BnF, 2015, 2 vol.
- ル・フロック *Ardeur et vengeance : anthropologie de la colère au XVIIe siècle*, Champion, 2022 (à paraître)
- 多賀『アイデアと制度』(名古屋大学出版会, 2008 年);『なぜ, 人間は宇宙をめざすのか 「宇宙の人間学」から考える宇宙進出の意味と価値』(共著, 誠文堂新光社, 2015 年)
- 守田『フランス語学の最前線第 5 巻』(共著, ひつじ書房, 2017)
- 中筋『フランス演劇にみるボディワークの萌芽—「演技」から「表現」へ』(世界思想社, 2015)
- 森本『〈生表象〉の近代—自伝, フィクション, 学知』(編著), 水声社, 2015; *Paul Valéry. L'Imaginaire et la genèse du sujet. De la psychologie à la poétique*, Minard Lettres Modernes, 2009

なお、2021 年度は学外非常勤講師として、伊藤玄吾同志社大学准教授が 16 世紀の文学を、小田涼関西学院大学教授がフランス語学を、松原冬二講師がマルセル・シュオップを講じている。

フランス語学フランス文学専修では、フランス語読解力の養成を主眼としつつ、テキストの解釈法、文学批評の方法論、文献資料の調査法などを学ぶことでフランス文学研究の基礎的能力を身につけることを目指すとともに、作品の背景にある思想史的、歴史的、社会的文脈を含めたフランスとフランス語圏の文化についての広い知識を身につけることを目的としている。フランス人教師の授業においては、上記の方針をふまえたうえで、フランス語を正確に読むこと、書くこと、話すことがバランスよく修得されるよう配慮されている。

本専修における研究の対象となるのは狭義の「文学」に限らない。美術、音楽、映画などの芸術作品や芸術批評、思想、哲学、歴史に関わる著作など、フランス語で書かれた文献であれば研究の対象となりうる。また、中世から現代に至るまで、フランス語で書かれた文献であればいかなる時代のもので研究の対象として選んでよい。当然のことながら、卒業論文のテーマは学生が主体的に選ぶことが期待される。

このようにジャンルや時代を問わず、フランスあるいはフランス語圏の文学・芸術・思想に関心のある人は、ぜひフランス語で書かれたテキストを入り口にして、奥深いフランス文化の探求の道に分け入ってみてほしい。

■ イタリア語学イタリア文学専修

准教授 村瀬 有司 イタリア・ルネサンス文学
特定准教授 イダ・ドゥレット イタリア近現代文学

〔著書・論文〕 村瀬：パオロ・ジョーヴィオ『戦いと愛のインプレーザについての対話』（抄訳、『原典イタリア・ルネサンス芸術論』下巻、名古屋大学出版会、2021年、所収）、トクァート・タッソ『詩作論』（訳書、水声社、2019年）；『エルサレム解放』の偶数行から始まる直接話法について『イタリア学会誌』第70号、2020年、

ドゥレット：E. Montale, *Antologia da "Altri versi"*, prefazione di Alberto Casadei, introduzione, selezione e commento a cura di Ida Duretto, Pisa, ETS, 2017. «*Il mondo può / fare a meno di tutto, anche di sé*». Montale, *Sartre e il tema della fama in "All'alba"*, in «REM, Rivista Internazionale di Studi su Eugenio Montale», 1, 2020. «*Que' due lettori (forse voleva dire attori)*»: *Madame de Staël, Leopardi e la traduzione 'perfetta'*, in «*Studium Ricerca*», 5, 2020.

イタリア文学は、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョの三大詩人を筆頭に、アリオストやタッソらルネサンスの詩人たち、マキアヴェッリやブルーノをはじめとする個性的な思想家、ガリレオに代表される科学者、さらにはゴールドーニやレオバルディやマンゾーニ、あるいはピランデッロやカルヴィーノやウンベルト・エーコといった近現代の作家・詩人・戯曲家など、多彩な逸材を擁している。特にイタリアの古典作品の影響は、中世から現代に至るまで、ヨーロッパの文芸・芸術・思想に幅広い影響を及ぼしている。

一方で、イタリア語学イタリア文学を専門に学ぶことができる国内の教育機関は非常に少ない。研究の裾野が狭いために、重要な詩人・作家の作品でいまだ日本に紹介されていないものも多い。このような現状のなか、当専修は、国内の数少ない専門教育機関としてイタリア文学を学ぶ貴重な場を提供している。

専修担当教員の村瀬は、ルネサンス期の詩と詩論を研究している。特定准教授のイダ・ドゥレットは近現代のイタリア文学の研究を行っている。専修の授業では、ダンテ、ペトラルカからレオバルディ、モンターレ、カルヴィーノまで、多様な詩人・作家を取り上げている。また他大学の先生方の協力をえて幅広い分野からトピックを提供することに努めている。若手研究者主催の読書会も盛んに行われている。

専修の授業で何より重要となるのは、原典の正確な読解である。学部生は日々の授業でイタリア語の読解力を培ったうえで、それぞれが興味を抱く分野にアプローチすることになる。最近の卒業論文で取り上げられた作家・詩人は、ボッカッチョ、ジャンバティスタ・バジレ、マンゾーニ、ピランデッロ、プリーモ・レーヴィ、ブツァーティなどである。また過去の卒業論文にはオペラの歌詞を論じたものもある。

イタリア語の授業（共通教育）は、1回生から受講できる。文学部でも、文法を集中的に学ぶ『イタリア語4時間コース』が開設されている。2回生以上を対象にイタリア語講読の授業も開かれている。また1回生から履修できる「イタリア文学史」の講義では、イタリア文学にアクセスするための手ほどきが行われている。興味のある方はぜひどうぞ。

専修のホームページはこちら：<http://www.eonet.ne.jp/~italomania-kyoto/>